

# 往復 書簡

拝啓 高木 勇樹様

総裁は、ご自身で農業をしたいと思われたことはありますでしょうか？

初めてのお便りでの、唐突な質問をお許しください。私は先祖代々続く農家の後継者で、農業を始めて五年目になります。都会での生活とは違い、田舎では自然のリズムに合わせることによって、人間らしい素直な暮らしが手に入りました。朝日とともに動き始め、夕日が沈めば終了。澄んだ空気と清らかな水、食卓には自分の手で育てたお米や旬の野菜が並びます。仕事も家事も子育てもすべてがつながっていて、私と妻で自然に分担できています。煩わしい人間関係に気を擦り減らすこともなく、自律しながら自由に暮らしをデザインできる。こんな職業はめったにありません。農家になることを選んで本当に良かったと感じる毎日です。

私が農業をしたいと思うようになったのは、農業が美しい農村風景を守り、健全な環境を育んでいることを、大学生生活やドイツ留学を通じて学び、そのことに大きな魅力を感じたからです。たとえば阿蘇に広がる草原は、農家が野焼きや放牧をすることで何千年も続いているのです。全国にある美しい棚田も、お米を作るこ

とで維持されていることは、総裁並びに読者諸氏もご承知のことと存じます。日本の農村風景や文化を育んでいるのが、農業であり農家なのです。

とはいえ「こんなに良いことをしているんだから農業を支えてくれよ！」と一般消費者に向かって真正面から叫んでも問題が重なります。でも日本国として食料自給率を本気で高めようという気概が見えない以上、私たち農家自身が食料生産以外に果たしている役割について、より多くの人に理解してもらう努力も必要です。

そこで、わが家では「おいしい」、「あんぜん」、「しんせん」、「すてき」の頭文字から名付けられた無農薬の「おあしす米」を産直していますが、そのお客さんに対して、農村の豊かさや風景の美しさを毎月のお便りで伝えています。その他にも、修学旅行生の受け入れや、異業種仲間によるサークル活動などを通して、農家の「楽しさ」や農業による「恵み」を少しでも分かち合えるように心がけています。

農業がしたくてもできない、都会にいなながらも土とつながっていたい、そんな人たちの欲求に応えていくことも、これからの農家としての大切な仕事のひとつだと思います。

敬具

おおつこうた  
1975年熊本県生まれ  
98年慶応大学環境情報学部卒業。東京農工大学大学院を経て、ドイツ・ミュンヘン工科大学にて修士号を取得  
帰国後「農村景観を守りたい」と、03年から南阿蘇村の叔父の下で就農。農閑期には語学や専門を活かした仕事も行っている。著書は、編集者募集中!の「百笑生活」5年生。URL <http://www.aso.ne.jp/reisi/>

Kotai Otsu



農業  
大津 耕太

拜復 大津耕太様

四〇年ほど前、九州農政局に勤務したことがあります。その頃は日本の畜産の黎明期で、阿蘇久住飯田高原の草地開発事業の調査事務所が農政局に設置されました。私は草地酪農と水田酪農の経営上の得失や入会林野への対応の具体策を先輩同僚とともに検討するチームの一員として、何度も耕太さんご一家が毎日見ておられるあの雄大な阿蘇のお山(阿蘇種畜牧場)に通ったものです。

耕太さん、愛梨さんのお書きになったものなどを読ませて頂きましたが、大変円滑に就農できて本当によかったですと思いました。この往復書簡で文通した方の中には想像を絶する苦労の末、就農に成功された方もおられます。

冒頭のご質問におこたえします。私自身は自分の生活の基盤とするという意味での農業就業を考えたことはありません。むしろ、行政官という立場で農業、農村、食料の問題に携わりたいと思い、その道に入ったのです。逆にお尋ねします。農業をしたい、農業を職業にしたいと熱望しながら、なかなか、資金面のことを除き、農地を借り入れられないなどによりその思いを果たせていない人がいます。一方、耕作放棄地が全国で三九

万畝ある、不作付地も二〇万畝余あるという現実を、耕太さんはどうお考えになりますか。

それから小さい農家ということを強調されておられます。私は、小さい、大きいは何を基準にするのかだと思います。面積だけを基準にすることは意味がなく、経営内容、換言すればどのような経営をすることによって、みずからの生計をたてるのではないかということですから、私はお上(市町村行政)が経営を認定する現在の認定農業者制度は、耕太さんのような経営者にはあわない。むしろ、世の中(国民、消費者)が、その経営を評価するシステムの方がずっと経営者のやり甲斐につながるのではないかと思っております。

日本国として本気で食料自給率を高めようという気概がみえないと指摘されておりますが、耕太さんはどのようにすれば食料自給率が向上するとお考えですか。何を突破口とすればよいと考えておられますか。大事なことは、生産者の目線だけでなく国民、消費者の目線だと思えます。この点については何かお考えがありますか。

「おあしす米」の命名とその内容は本当にすばらしい。やはり若い感性の賜物と感心してしまいます。では本年が良い年でありますように。

敬具



農林漁業金融公庫 総裁

高木 勇樹